

巷

「平和と建築」

日時:2018/03/17(土)
講演:14:00~16:00



「建築を通して平和を観る」

グローバル社会となった今、常に『平和』が希求される。この観念的な言葉を日常の中でどう行動すれば平和に繋がって行くのか？このことで建築家が発言できることはないのか？かつて建築生産の場は希望にあふれ多くの人があることに参加した時代があった、現代は急速に生産や労働の喜びというものが見えにくくなった時代だが、まだ辛うじて建築は様々な意味で可視化できるものが残されている、この辺りに原因と解決の道を探ってみたい。



今井 均

「消滅意識が生む軟弱性」

イタリアでの生活体験。そこにあるのは造った建物は不滅だという感覚か。一方日本では、戦火を含む大火、地震、津波で消えるという意識。それが自然と共生し消滅する死生観を生んだと言える。こうして「消滅意識」が、街も、人も、の安寧観を限定する。つまり、造っては消えることへの「諦め」と、逆の「積極性」を同居させることになった。こうして、消えるのも安寧(平和)、造りかえるのも闊達(平和)となり、ヨーロッパのように盤石な一枚岩のように強固な、街が支える平和の概念は生まれなかったのだと思う。

この国で、建築・街づくり・界隈の活性化が、真摯に不滅の「平和」だと実感させることは難しいと思う。それは「一時の幸せ」であって、誠の「平和」ではない。



大倉富美雄

過去の世界から伝わった歴史的遺産には二種類ある。正倉院とその宝物のようにそれがもたらされ、作られた時代からそのままの形で継承されてきたものを伝世品という。もう一つは過去の文明を伝えるものが発掘によって地中から出てくるもので、それらを出土品という。ある文明を征服した人々は、それまでにあった社会を消去することから自分達の文明を始めるのが普通なので、出土品は文明とそれが破壊された記録であり、伝世品は平和が継続したことの証左であると言える。

世界の歴史的遺物の8割は出土品であると言われるが、日本の文化財は8割が伝世品である。その比率自体が、我々にとっての平和の価値と、その価値観の世界の標準との乖離を表しているようである。



黒木 正郎

30年に渡り事業者と地元住民間の厳しい紛争が続いたプロジェクトを担当した経験から・・・平和を考える。敷地周辺には、良好な住環境を守ろうと大型ビル建設反対の幟が林立し、近隣説明会では住民の罵声が飛び交いペットボトルまで投げつけられる有様だった。事業者の一部からは、工事車両の進入を阻止する反対派住民のピケを強引に突破してでも、工事を強行すべきとの過激な意見も聞かれた。しかし、辛抱強く住民達との地道な話し合いを続け、その要望を汲み上げ、時には利潤ばかりを追い求める事業者に対しては全く新しい視点での空間創りを提示する中、次第に状況は好転していった。竣工時には、不況にも拘わらず有カテナントが即決し喜ぶ事業者だけではなく、自分達の街に建ち上がった新しい建物を温かく迎え入れようとする地元住民達の明るい笑顔が並んだ。

ここで考えた事は、小さなリンゴを卑しく奪い合う状況に対し、そのリンゴを甘く大きく育て上げ、仲良く分かち合えるシチュエーションを生み出すことが建築家の役割であり、その様なパラダイムシフトを起こさせる思考こそが、真の平和をもたらすのではないかと言うことだった。



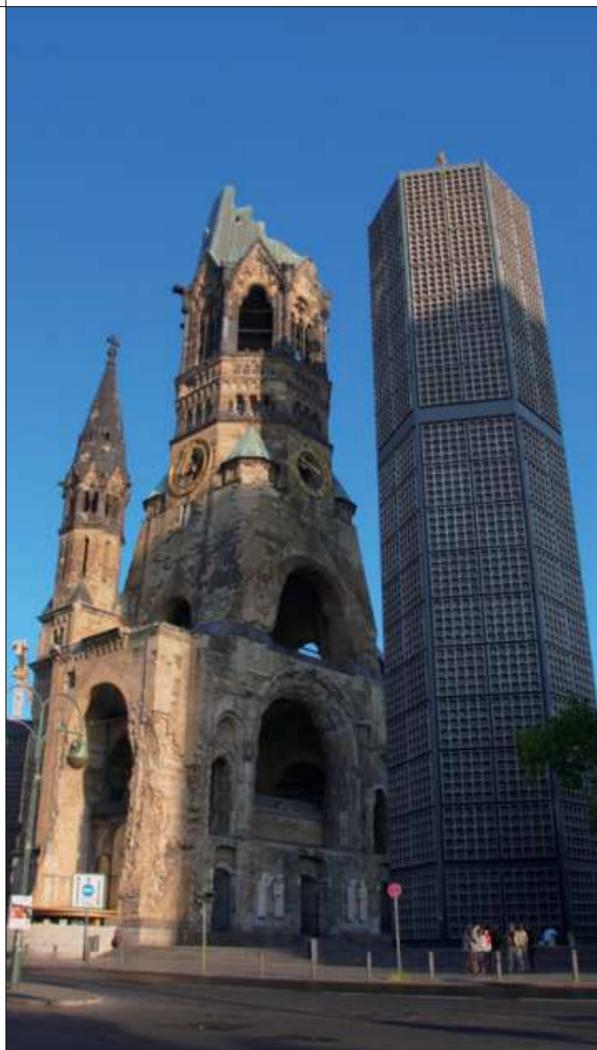
武田有左

「都市のみえない力」

平和と建築、ロシアの巨匠文学作品のような壮大なテーマである。その二つに因果が存在するだろうかと考えてみたとき、パリやベネチアの都市の美しさを思う。それを守りたいと思う心に、破壊を押しとどめる力が存在する。長い年月かけて成立した美しい都市、大切に守られた建築群、今あるものの背景に存在する価値を見出す心は、平和を守ろうとする心につながる。ただし、平和を作るのは心の問題であり、美しい建築が人の心を変える力を持つかは定かでないが、想像力を高める見えない裏側を見る力を、建築を通して考えてみたい。



田口 知子



「ベルリンの再生から想うこと」

平和を意識すると、「破壊と創造」を思い浮かべる。日本では焼け野原からバラックが立ち、無秩序な建築が各地に生まれ、美しい日本の街並みは破壊された。

一方、ベルリンでは「破壊された街を元に戻す」ことで平和を守る。文化や創造に対する意識の違いが、破壊の歴史が深い欧州と、初めて侵略された日本では大きく異なる。

平和とは、創造とは、何を意識しなければいけないのか、建築家はもう少し真摯に考えなければならない。平和ボケした日本人はどこに行くのか、とても心配です。



宮田多津夫

「平和とは？建築家の職能とは？」

建築は人と人の関係、人と社会を形つくるものです。マザーテレサの言葉に「沈黙の実は祈り、祈りの実は信仰、信仰の実は愛、愛の実は奉仕、奉仕の実は平和」があります。マザーが言う平和とは、単に争いがないということではない愛と奉仕に立脚した人間の姿です。また、AIA(アメリカ建築家協会)の開始宣言は「私たち建築家がどのような処、どのような時にあっても神の作り給うたこの地上の上に人々の環境をつくるというこの神聖な任務を、立派に果たすことができるようにそれぞれ信ずる神に助けを求めて祈りましょう」とあります。現世の損得や人間関係を越えた絶対的なものに照らして果たされるものだという認識を建築家の共通の根底にしている宣言です。今回は自分自身と真剣に向き合う MAS セミナーです。



村上晶子

「集いの場に見る平和と建築」

平和を、「人が集まって楽しく談笑しているシーン」に感じる。カフェやパブでビールを飲みながら談笑している人、ガーデンテーブルで家族が楽しく食事をしている姿、そこに、気持ちの良い環境、建築があるからこそ、人が集うのである。このような良質な場を如何にして創ることができるのか？プロである建築家の味、それとも素人の味、皆で一緒につくる味、建築にも色々な味があろう。その多様性が街を平和で楽しくしている。



連健夫